

番号	分類	名称	作者等	数量	版写	時代
<b>井伊直中 (いいなおなか) 1766-1831</b>						
1	日記・記録・古文書	いえやすこうよりいいまんちよさまへおんつきびと 従家康公井伊万千代様江御附人		1冊	写本	江戸時代中後期 写
2	兵法・武道書	しかんしょう 師鑑抄	ほうじょううじなが 北条氏長(1609-1670) 著	2冊	写本	正保4年(1647) 成立
3	弓馬書	ゆみしょ 弓書		9冊	写本	応永32年(1425) 成立
4	弓馬書	しゃほうしなんわかしゅうちゅうかい 射法指南和歌集註解	ますじま 増嶋高雄 註	1冊	写本	万治4年(1661) 成立
5	弓馬書	しゅうかしゅう 拾華集	かとう 加藤安光 著 いいなおなか 井伊直中(1766-1831) 写	1冊	写本	天明5年(1785) 成立 同年 写
6	仏書	ぶつそくせきひめい 仏足石碑銘	のろげんじょう 野呂元丈(1693-1761) 著	1冊	刊本	江戸時代中期 刊
7	詩文書	とうしせんかい 唐詩選解	うのとうざん 宇野東山(1735-1813) 著	3冊	刊本	天明4年(1784) 刊
8	歌書	まんようしんさいひやくしゅかい 万葉新採百首解	かものまぶち 賀茂真淵(1697-1769) 著 いいなおなか 井伊直中(1766-1831) 写	2冊	写本	江戸時代中期 成立 天明2年(1782) 写
9	物語・小説	たけとりものがたりしょう 竹取物語抄	こやただし 小山儀(1750-1775) の遺稿に いりえまさよし 入江昌喜(1722-1800)が 考証・頭注	2冊	刊本	天明4年(1784) 刊
10	香書	のき 軒のしのぶ	しゅこくしゃ 菟谷舎維篤 編	10冊	写本	江戸時代中後期 写
11	碁・棋書	ここんとうりゅうしんごきょう 古今当流新碁経	あきやせんぼく 秋山仙朴 著	1冊	刊本	江戸時代中期 刊
12	碁・棋書	しよけしょうぎさしぐみき 諸家将棋指組記	いいなおなか 井伊直中(1766-1831) 筆か	1冊	写本	江戸時代中後期 筆
<b>井伊直亮 (いいなおあき) 1794-1850</b>						
13	詩文書	とんごしてん 頓悟詩伝	ちば 千葉玄之 著	6冊	写本	天明4年(1784) 成立
14	詩文書	せんちゅうとうしせん 箋註唐詩選	とさきたんえん 戸崎淡園(1724-1806) 註	8冊	刊本	天明4年(1784) 刊
15	有職・礼式書	こきんもんよう 古今文様		1帖	写本	文政12年(1829) 写
16	有職・礼式書	しゅうこじつしゅ 集古十種	まつだいらさだのぶ 松平定信(1758-1829) 編	47冊	刊本	江戸時代後期 刊
17	兵法・武道書	とうけんぶようろん 刀剣武用論	すいしんし まさひで 水心子正秀(1750-1825) 著	1冊	刊本	江戸時代後期 刊
18	兵法・武道書	みょうちんかぶとのず 明珍甲之図	画) 高師文吾 写 いいなおあき 書) 井伊直亮(1794-1850) 写	1冊	写本	弘化4年(1847) 写
19	弓馬書	おがさわらゆみしよもくろく 小笠原弓書目録	いいなおあき 井伊直亮(1794-1850) 筆	1状	写本	江戸時代後期 筆
20	弓馬書	たづなはらおびずしき 手綱腹帯図式		1冊	写本	文政13年(1830) 写
21	弓馬書	きゅうばこじつこう 弓馬故実考	こばやしよしえ 小林義兄(1743-1821) 著・写	2冊	写本	文化10年(1813) 写
22	鷹書	たかしよ 鷹書		2冊	写本	天保15年(1844) 写
23	鷹書	しんしゅうたかきょう 新修鷹経		1冊	写本	天保15年(1844) 写
24	鷹書	おおみやりゅうけいもうしゅう 大宮流啓蒙集		8冊	写本	天保15年(1844) 写
25	歌書	どくかんわかしゅう 独看和歌集	まつだいらさだのぶ 松平定信(1758-1829) 編	3冊	刊本	文政9年(1826) 刊
26	歌書	かかいひやくにんせん 歌諧百人選	石雲居海寿 編 いいなおあき 井伊直亮(1794-1850) 写	2冊	写本	安永4年(1775) 成立 天保14年(1843) 写

	分類	名称	作者等	数量	版写	時代
27	歌書	こきんせん 古今選	もとおりのりなが 本居宣長(1730-1801) 撰	1冊	刊本	文化5年(1808) 刊
28	物語・小説	えいがものがたり 栄華物語		21冊	刊本	明暦2年(1656) 刊
29	茶書	せんけでんじゆのしよ 千家伝授之書	いいなおあき 井伊直亮(1794-1850) 写	1冊	写本	文政2年(1819) 写
30	茶書	めいきよせ 名器寄		3冊	写本	江戸時代後期 写
31	香書	よねかわとくみこうしき うめ 米川十組香私記 (梅のしるべ)	しゆきょうしゃしゆんりゆう 葎香舎春龍(1721-1799) 著 いいなおあき 井伊直亮(1794-1850) 写	1冊	写本	宝暦12年(1762) 成立 文化13年(1816) 写
32	医学・本草・ 農学・洋書	わけ えど ハルマ和解 (江戸ハルマ)	いなむらさんぼく 稲村三伯(1758-1811)  ほか 編	13冊	写本	寛政8年(1796) 成立
33	医学・本草・ 農学・洋書	当家息命丹並虎黒焼		1冊	写本	江戸時代後期 写
34	地誌	おうみめいしよずえ 近江名所図会	はたせきでん あきざとりとう 秦石田・秋里籬島 編  しとみかんげつにしむらちゆうわ 蔀関月・西村中和 画	4冊	刊本	文化11年(1814) 刊
35	楽書	がっかろく 楽家録	あべすえひさ 安倍季尚(1622-1708) 著 あべすえつぐ 安倍季随(1777-1854) 写	45冊	写本	元禄3年(1690) 成立 江戸時代後期 写
36	－	しゆんぶうかん へんがく 「春風館」扁額	まつだいらさだのぶ 松平定信(1758-1829) 筆	1面	－	寛政6年(1794) 筆
<b>井伊直弼 (い い なおすけ) 1815-1860</b>						
37	弓馬書	ぶもんようかんしよ 武門要鑑抄	さわざきもんど 沢崎主水 著	10冊	写本	江戸時代前期 成立 江戸時代後期 写
38	兵法・武道書	しちごさんやわらいあいでんしよ 七五三柔居相伝書	い い なおすけ 井伊直弼(1815-1860) 筆	1巻	写本	安政元年(1854) 筆
39	仏書	くでんしよ 口伝鈔	かくによ 覚如(1271-1351) 著 い い なおすけ 井伊直弼(1815-1860) 写	1冊	写本	元弘元年(1331) 成立 江戸時代後期 写
40	仏書	しよしんほんかいしゆう 諸神本懐集	ぞんかく 存覚(1290-1373) 著 い い なおすけ 井伊直弼(1815-1860) 写	1冊	写本	元亨4年(1324) 成立 江戸時代後期 写
41	物語・小説	いせものがたり 伊勢物語	い い なおすけ 井伊直弼(1815-1860) 写	1冊	写本	江戸時代後期 写
42	物語・小説	さごろも 狭衣		8冊	写本	江戸時代後期 写
43	物語・小説	ものがたり すみよし物語		2冊	刊本	宝暦9年(1759) 刊
44	国学書	けんきようじん 鉗狂人	もとおりのりなが 本居宣長(1730-1801) 著	1冊	写本	天明5年(1785) 成立 江戸時代後期 写
45	茶書	なんぼうろくぬきがき 南坊録抜書	い い なおすけ 井伊直弼(1815-1860) 写	1冊	写本	江戸時代後期 写
46	茶書	いけいちゆうさんびやくかじよ 怡溪註三百ヶ条	い い なおあき 井伊直亮(1794-1850) 写	3冊	写本	天保14年(1843) 写
47	茶書	そうかんこうさんびやくじよ 宗関公三百条	まのあきよし 真野明美 写	3冊	写本	江戸時代後期 写
48	茶書	おがたりゆうとうじゆつひほうしよ 緒方流陶術秘法書	みうらけんや 三浦乾也(1821-1889) 著 い い なおすけ 井伊直弼(1815-1860) 写	1冊	写本	江戸時代後期 成立 江戸時代後期 写
49	茶書	ちやのゆしよもくかぎつけ 茶湯書目書付	い い なおすけ 井伊直弼(1815-1860) 筆	1枚	写本	嘉永3年(1850) 筆か

\*すべて彦根城博物館蔵 (井伊家伝来)

## 写真解説

\*番号は作品リストの番号と一致します。

### 4 射法指南和歌集 註解 1冊 【井伊直中蔵書】

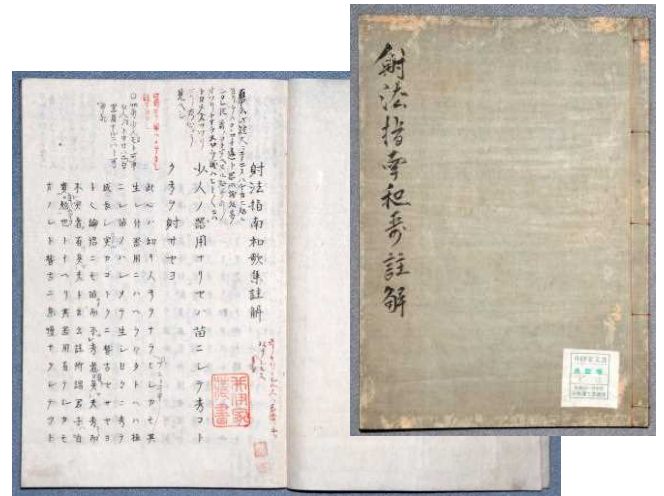
万治4年(1661年)成立 江戸時代中後期 写

縦27.0cm 横18.9cm

当館蔵(井伊家伝来典籍)

弓術における極意の伝達、指導方法として、その内容を教歌にして詠む方法があります。本書は、日置流の「射法指南歌」に彦根藩の日置流の弓術師範、増嶋高雄(江戸時代前期の人)が註解を加えたものです。直中は多くの弓術書を蔵し、その一部を息子の直亮に貸していたと考えられる文書も伝来しています(作品19)。本書の表紙の外題は直亮筆で、直中から譲り受けたか、直中没後に直亮の手に渡り、使用した可能性があるものです。

冒頭の句は「少人ノ器用ナリセバ苗ニシテ秀ゴトク弓ヲ射サセヨ」一生まれつき器用な子は、苗が成長して良い実をつけるよう、稽古に精進すべきであることを解説しています。



### 8 万葉新採百首解 2冊 【井伊直中蔵書】

賀茂真淵 著 江戸時代中期 成立

井伊直中 写 天明2年(1782) 写

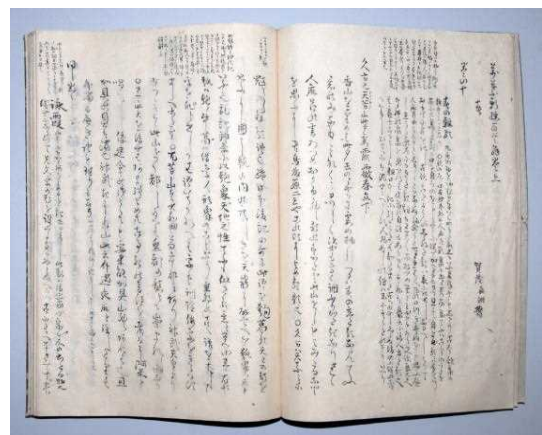
各縦26.9cm 横18.9cm

当館蔵(井伊家伝来典籍)

万葉集から抜き出した百首の注釈書。原本は、和学御用として田安宗武(1715-1771)に仕えた国学者の賀茂真淵(1697-1769)が、田安の命により執筆呈上したものです。

この冊子には、天明2年(1782)に蘭陵(井伊直中)が書写した旨の奥書があります。この時直中は数え年16歳で、表紙の外題の文字も直中筆と見られます。

直中の国学や和歌に関する蔵書は多く伝わっています。時代的には、江戸時代中後期に国学が発達したことが背景にあります、個人的にも関心が高かった分野だと考えられます。





13 <sup>とんごしでん</sup>頓悟詩伝 6冊 【井伊直亮蔵書】

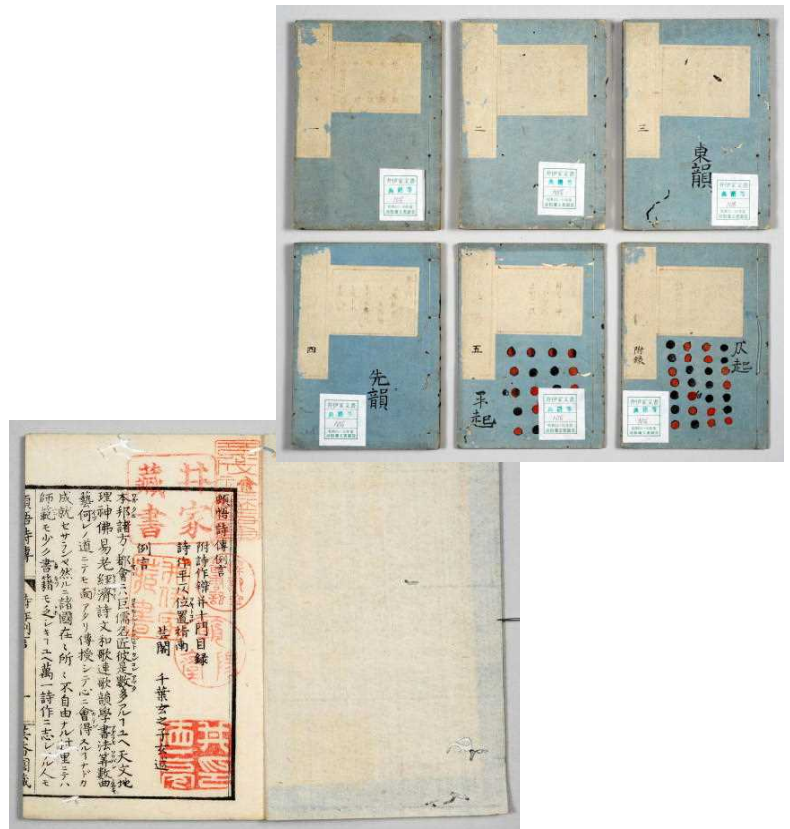
千葉玄之 著

天明4年(1784年) 刊

各縦16.0cm 横11.2cm

当館蔵(井伊家伝来典籍)

漢詩の基本的な知識をまとめた書。詩題、詩語、熟語、地名、異名や、押韻、<sup>おういん</sup>平韻などについて記しています。多くの蔵書印が捺されますが、そのうち2種が直亮のもので、特に「井直亮印(白文方印)」は、管見の範囲では最も早い時期に使用していたと見られる印です。また、少なくとも2種が直亮以前の蔵書印と考えられ、他資料により、井伊家の誰かの印であった可能性が高いと考えられるものです。漢詩は、武家の教養として必須のものでしたが、その勉強の初期に繰る本が上の世代から下の世代に引き継がれたということになります。書き込まれた拙い字や落書のようなものが、若い時分に使用していたことを思わせます。



30 <sup>めいきよせ</sup>名器寄 3冊 【井伊直亮蔵書】

江戸時代後期 写

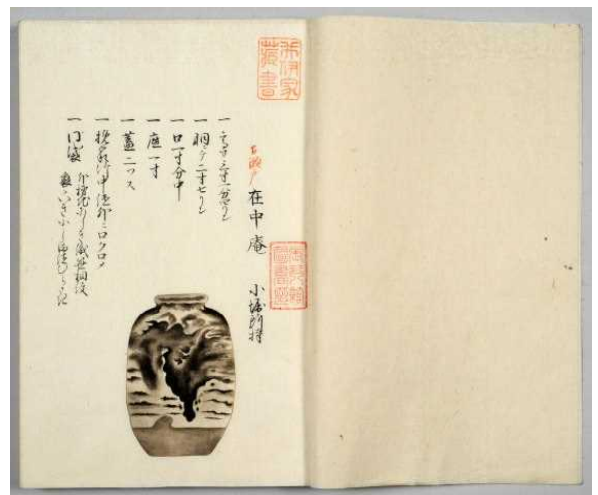
各縦26.8cm 横19.7cm

当館蔵(井伊家伝来典籍)

近世から近代にかけて多くの写本が作られた3冊本の茶道具の名物記。一般に、「三冊物名物記」、「三冊本名物記」と呼ばれます。下総国佐倉藩主松平乗邑<sup>まつだいらのりさと</sup>(1686-1746)の編と伝えられますが、初めは心覚えのような数丁のものが写本を重ねる度に書き加えられて大部になったもので、名物の借覧に関する書き込みが乗邑の手に拠るものとの説が提示されています。

本写本は、小堀遠州所持の茶入「在中庵」から始まる百余りの道具を掲載し、図は別紙に描き、切り抜いてそれぞれ貼り付けています。各冊に、直亮の蔵書印「張琴館図書印」が捺されています。

直亮は茶の湯に関する蔵書を多く持っていましたが、そのうち茶道具に関する蔵書も少なくなく、道具に対してかなり関心を向けていたことが窺えます。



32 ハルマ和解<sup>わけ えど</sup> (江戸ハルマ) 13冊 【井伊直亮蔵書】

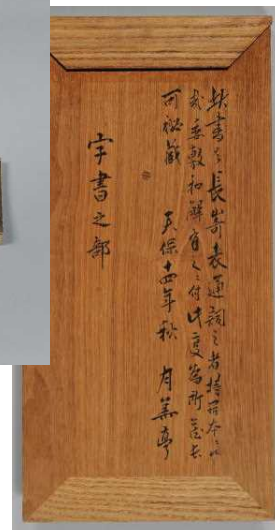
江戸時代後期 写

各縦25.0cm 横17.8cm

当館蔵(井伊家伝来典籍)

ハルマ和解は、蘭学者<sup>いなむらさんぼく</sup>稲村三伯(1758-1811)を中心に編成された日本最初の蘭日辞典。寛政8年(1796)に成稿、以後、2、3年間に30余部を順次世に送り、蘭学の発展に大きく寄与しました。その名称は、フランス・ハルマの『蘭仏辞典』(1729年 第2版)に基づいて作られたことに拠ります。刊本は見出し語の蘭語を木活字とし、訳語を毛筆で記しますが、本書は全て手書きの書写本で書き込みもあり、巻末に「寛政八年二月十六日」というローマ字の奥書が記されています。天保14年(1843)秋に書かれた直亮の箱蓋裏の書付によれば、長崎通詞所持本だろうか、詳しい日本語解説があるので入手したとあります。蓋表の箱書「紅毛書 十三冊」も直亮筆。

直亮は、洋書だけでなく、時計や望遠鏡など、舶来品を多く収集していました。



蓋裏書

41 伊勢物語<sup>いせものがたり</sup> 1冊 【井伊直弼蔵書】

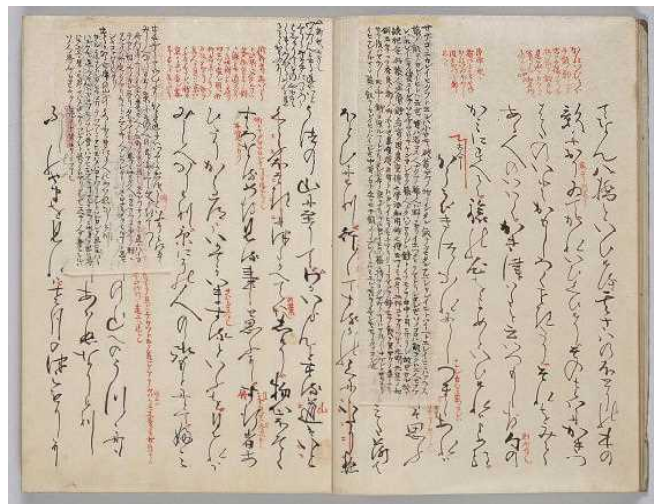
井伊直弼 写

江戸時代後期 写

縦25.7cm 横18.8cm

当館蔵(彦根藩井伊家文書)

井伊直弼が、伊勢物語を書写して解説を書き加えたもの。諸書を繙きながら一言一句を漏らさず徹底して学んだ跡がうかがえます。引用した書は多岐にわたり、源氏物語をはじめ、竹取物語、枕草子、蜻蛉日記、万葉集、古今集、日本書紀、和名抄、白氏文集、法華経等々。その書風から、世子になる前の10~20代頃のものともみられます。直弼は、若い頃から国学や和歌を熱心に学んでいたことが蔵書からも分かります。



45 <sup>なんぼうろくぬきがき</sup> 南坊録抜書 1冊 【井伊直弼蔵書】

井伊直弼 写

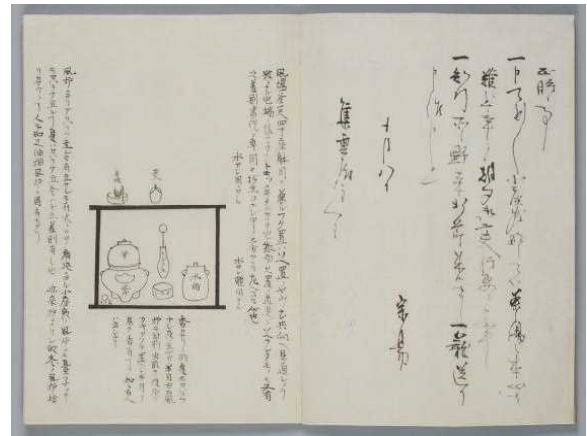
江戸時代後期 写

縦26.3cm 横18.8cm

当館蔵(彦根藩井伊家文書)

南坊録は、千利休の茶道伝書と称される茶書。利休の弟子の南坊宗啓が授かった口伝秘事を記したものとされてきましたが、福岡藩黒田家の家老、立花実山たちばなじつざんの著述とする説もあります。利休の侘茶の理念を伝える書として重要視されてきました。

本書は、井伊直弼が、南坊録から台子の巻、置棚おきだなの巻について抜書したもので、青年期のものと考えられます。「茶湯一会集」など、直弼著作の茶書にはこの書の引用が多く見られ、影響の大きさがうかがわれます。江戸時代後期の代表的な大名茶人・井伊直弼は、こうした学習の積み重ねによって生まれたのです。



【参考】蔵書印

井伊直中	井伊直亮		井伊直弼
 <p data-bbox="268 1832 352 1865">「亀印」</p>	 <p data-bbox="550 1832 746 1865">「懐馭斎図書記」</p>	 <p data-bbox="890 1832 1086 1865">「張琴館図書印」</p>	 <p data-bbox="1246 1832 1358 1865">「埋木館」</p>